

ロバート・コール バリフォルニア大
カリフォルニア校名誉教授

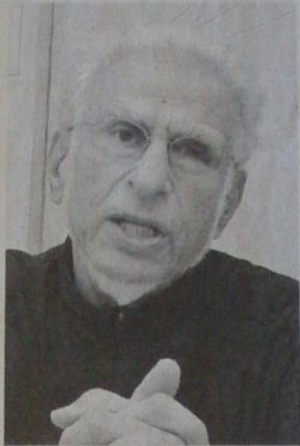
ITこそモノ作りの中核

「スマートフォンの高機能携帯電話の急速な普及などIT（情報技術）が社会の姿や企業の経営を変えています。」

「ITの発展は情報伝達のあり方を大きく変えた。企業は製品・サービス開発ではインターネット経由でソフトウェアや機能を利用できる」クラウドコンピューティングの普及が大きな商機を生み出した。ベンチャー企業も巨額投資をせず、大企業と同様に最新のソフトウェアを機動的に利用できるようになった」

2012 視点

6



米ミシガン大、カリフォルニア大バークレー校教授を経て2003年から現職。日米欧の自動車・電機産業に詳しく、同志社大共同研究員も務める。74歳。

「ソフトを業務効率化やコスト削減のための補助的手段とみる考え方が一部に残るのは残念だ。以上がソフトウェアを見れば、ソフトこそが中核企業はITを戦略的に活

技術だとわかる。IT企業用し、売上高拡大や顧客業だけではない。独シ獲得、サービス創出に生かしている」

ソフト力の勝負
日本企業は世界の

「統合されたハード（機器）とソフト、サービスが顧客満足度を高め、収益拡大をもたらす。アップグレードの技術者にソフト開発を学ばせるなど具体的に取り組んでいる。数年後には成果が表れるだろう」

「日本でも問題意識をもつ経営者は多いはずですが、変革が進まないのはなぜでしょうか。1960年代に自動車産業の研究で訪日した当時、日本企業は経営者から現場の従業員まで危機意識をもって仕事をしていた。『欧米に追いつ

IT市場で存在感が薄く、製造業も円高で苦戦しています。」

「日本は強みであるモノ作りにこだわらざるを得ない。官民間問わず、あらゆる分野、業界でITは組織や業務のあり方、スピードを変革する原動力となっている。中国や韓国の企業の攻勢を受けて、『付加価値が高い分野で競争力を維持する』という方針を掲げる日本企業が多いが、ITこそが付加価値向上のために最も必要な技術だ」

「この日本企業や日本人は課題は口にするが、当時に比べると切迫感が薄い。豊かになったせいだろうか。韓国や中国の企業は急速に力をつけているが、健全な危機意識をもって迅速に変革できれば、日本企業は十分に競争できる。ITはその重要な武器となる」

危機感足りず

「岡田信行」

（おわり）

詳細を電子版に